

〈資料紹介〉『山王靈験記』「頼豪阿闍梨絵巻」翻刻・注釈（上）

城 阪 早 紀

本稿は、広島大学図書館所蔵「頼豪阿闍梨絵巻」の翻刻を行い、注釈を施したものである。^①【解題】に記したように、「頼豪阿闍梨絵巻」は、全五段からなる。本稿では第一段から第三段までについて記し、本誌次号に第四段と第五段を記す。

【解題】

広島大学図書館のウェブサイト「デジタル郷土図書館」の「解説」によると、

卷子本。一卷。組紐付き。箱入り。表紙は、藍色、唐草模様の絹の布表紙だが、損傷が激しい。料紙は、楮交じり斐紙。奥書は無く、書写者・書写年次ともに不明。内題、外題共に無く、登録書名は、箱に二箇所「頼豪阿闍梨絵巻」と墨書されているのに依る。^②

〈資料紹介〉『山王靈験記』「頼豪阿闍梨絵巻」翻刻・注釈（上）

とある。つまり「頼豪阿闍梨絵巻」という書名は、奥書・内題・外題によるものではなく、箱の墨書によるもの、ということになる。

頼豪は、平安後期の天台僧である。頼豪にまつわる説話として、たとえば覚一本『平家物語』巻第三に「頼豪」がある。白河天皇から皇子誕生の祈禱を命じられた三井寺の頼豪阿闍梨は、祈りによって敦文親王を誕生させた。その勳賞として三井寺の悲願であった戒壇の創建を願ったが、延暦寺の反対のため許されなかった。頼豪は憤りのあまり食物を断って干死し、怨霊となって敦文親王をとり殺した、というものである。「頼豪阿闍梨絵巻」にもこの説話は収められているものの、ことに頼豪を焦点化した絵巻ではない。

「頼豪阿闍梨絵巻」の構成は、次のようである。頼豪が登場する第三段と第四段の途中に、絵③が挿入されている。形式的には二段であるが、内容としては一連のものである。

第一段 院源 (絵①)

第二段 暹賀・聖救 (絵②)

第三段 頼豪 (絵③)

第四段 頼豪・良真 (絵④)

第五段 桓舜 (絵⑤)

「頼豪阿闍梨絵巻」に関して、先学によって指摘されていることを要約するとおよそ次のようである。^③

「頼豪阿闍梨絵巻」は、重要文化財に指定されている『山王靈験記』 穎川美術館本（井上家旧蔵本） 一巻の模本である。『山王靈験記』は、日吉山王の靈験に関する説話を描いた絵巻で、穎川美術館本その他に、和泉市久保惣記念美術館所蔵本（蓮華寺旧蔵本）二巻や、延暦寺所蔵本（生源寺旧蔵本）一巻が知られる。これらを合わせた四巻の『山王靈験記』は共通した画風であることから、一連の絵巻として制作されたことが分かる。その成立は、室町時代初期とされる。詞書のない断簡の存在や、『言継卿記』の「山王縁起十五巻」の記述から、本来は一五巻であったなどと推測される。^④

が現存している。うち、『山王絵詞』と『日吉山王利生記』には、「頼豪阿闍梨絵巻」と同一説話が認められる。「頼豪阿闍梨絵巻」との対応関係は、次の通りである。

「頼豪阿闍梨絵巻」 『山王絵詞』 『日吉山王利生記』

第一段 院源 五巻一段 ナシ

第二段 暹賀・聖救 五巻二段 三巻一段

第三段 頼豪 五巻三段 三巻八段

第四段 頼豪・良真 五巻四段 三巻九段

第五段 桓舜 五巻五・六段 六巻七段

【凡例】

一、底本には、広島大学図書館「デジタル郷土図書館」のうち、「広島大学所蔵 奈良絵本・室町時代物語」公開の「頼豪阿闍梨絵巻」^⑤を用いた。

二、翻刻にあたり、次の文献を参考にした。

・『山王絵詞』（一四巻）

・『日吉山王利生記』（九巻）

・『続日吉山王利生記』（一巻）

○年三月。

・梅津次郎「山王靈験記絵巻絵詞」『美術研究』九九、一九四〇年三月。
・景山春樹校注『神道大系 神社編二九 日吉』神道大系編纂会、一九八三年。

・広島大学図書館「デジタル郷土図書館」「広島大学所蔵 奈良絵本・室町時代物語」、翻刻^⑥。
なお、次の文献も参照した。

- ・塙保己一『続群書類従 第二輯 神祇部』一九三三年、平文社。
- ・近藤喜博『中世神仏説話 続』一九五五年、古典文庫。
- ・村山修一『妙法院資料 第五巻 古記録 古文書一』吉川弘文館、一九八〇年。

三、翻刻は、誤字・誤写と判断される箇所も含めて、忠実に活字化することを期した。ただし、次のような操作を行った。

- ・改行を／で示した。
 - ・異体字や略字は、通行の字体に改めた。
 - ・傍書は「」内に示した。
- 四、底本の誤字・誤写の確認や、文意を補うために、『山王靈驗記 絵詞』頤川美術館本・『山王絵詞』・『日吉山王利生記』との異同を調査した。本文の具体的な対応関係は、【解題】に記した通りである。異同は、意味に異なりが生じる場合のみ記した。略称および書誌情報は次の通り。

・『山王靈驗記絵詞』頤川美術館本：略称〈頤〉。

景山春樹校注『神道大系 神社編二九 日吉』神道大系
編纂会、一九八三年。

〈資料紹介〉『山王靈驗記』「頼蒙阿闍梨絵卷」翻刻・注釈（上）

・『山王絵詞』：略称〈妙〉。

村山修一『妙法院資料 第五巻 古記録 古文書一』吉川
弘文館、一九八〇年。

・『日吉山王利生記』：略称〈利〉。

景山春樹校注『神道大系 神社編二九 日吉』神道大系
編纂会、一九八三年。

五、釈文には、通読の便宜のため、校訂者の判断によって次のような操作を行った。

- ・改行を施した。
 - ・句読点・濁点・中黒を補った。
 - ・反復記号は、漢字の場合には「々」を用いた。仮名の場合には「ヽ」、「／」を用いず、文字を繰り返した。
 - ・漢字に送り仮名を補い、読み下し文に改めた。
- 例「態」↓「態と」 「無止事」↓「やむことなき」
- ・会話の部分、心中思惟の部分などに「」を補った。
- 六、語釈は、難解な語句や固有名詞などにつき記述した。適宜、類例を記し、本文読解の助けになるようつとめた。関連する語句は（↓）で送った。

第一段 院源

【翻刻】

本書筆者¹／一条殿兼良公／第二十六代の座主西方院和尚院／源は後
一条院御宇寛仁四年七月七日／天台座主に補せられけり同年十二月
／廿日權僧正に任せられて治山八ヶ年の／あひた治安万寿の比何の
年とはしらす／天下飢饉して山門煙を断しに座主／此事を悲て山王
に祈請せられし夢想／に大宮宝前に詣し給けるに正面の格子／あけ
られたり其うちをみれば無止事高僧／枕のうへに居給へり夢心地に⁴
大宮權現にて／わたらせ給なりと思たてまつるに此時こそ山／門飢
饉の事は申さめとおもひて則事の／よしを啓白其詞云近日天下飢饉⁵
山上／衰弊悲哉松門煙絶草庵食乏自非／權現之神恩者争助僧侶之法
命乎云々／其時高僧左右之御足をさしいたし給ふ／御あしのうら
た、れて処々に御血を現せ／りさて仰下さる、様は近日西国のかた
へ／行向て千僧供を求つるに我足損壞か／くのことしされとも猶も¹⁰
とめえず仍只今／北陸道の方へ行むかふ也と云々夢さめて／落涙こ
とにをさへかたし三箇日を経て／北陸道より大檀越上洛して俄に千¹⁴
僧／供をそひきける其後そ千僧供をはかな／らす座主受用せられけ
る／（絵①）¹⁶

【異同】

1 本書筆者一条兼良公（妙）ナシ。2 後一条院（妙）「後一条」
3 枕（妙）「床」。4 夢心地に（妙）「夢心地に見れハ」。5 大宮
權現にてわたらせ給なりと思たてまつるに（妙）「大宮權現也と
思ひ奉るニ」。6 啓白（妙）「啓白す」。7 草庵食乏（妙）「草菴
令」。8 さしいたし給ふ（妙）「もちあけて」。9 御血を現せり（
妙）「御血現せり」。10 行向て（妙）「行向」。11 千僧供（妙）
「千僧供養」。12 我足（妙）「和足」。13 夢さめて（妙）「夢さめ
て後」。14 大檀越（妙）「大檀那」。15 千僧供（妙）「千僧共」。
16 其後そ（妙）「其後は」。

【釈文】

本書筆者 一条殿兼良公

第二十六代の座主、西方院和尚院源は、後一条院御宇、寛仁四年
七月七日、天台座主に補せられけり。同年十二月廿日、權僧正に任
ぜられて、治山八ヶ年のあひだ、治安・万寿の比、何の年とはしら
ず、天下飢饉して山門煙を断しに、座主此事を悲て、山王に祈請せ
られし。

夢想に、大宮宝前に詣し給けるに、正面の格子あげられたり。其
うちをみれば、やむごとなき高僧、枕のうへに居給へり。夢心地に

「大宮権現にてわたらせ給なり」と思たてまつるに、「此時こそ山門飢饉の事は申さめ」とおもひて、則ち事のよしを啓白す。其詞に云く、「近日、天下飢饉し、山上衰弊す。悲哉。松門の煙絶え、草庵の食乏し。自ら権現の神恩にあらざれば、争か僧侶の法命助からんや」云々。

其時、高僧、左右の御足をさしだし給ふ。御足のうらただれて、処々に御血を現せり。さて、仰せ下さるる様は、「近日、西国のかたへ行向て、千僧供を求めつるに、我足損壞、かくのごとし。されども、猶もとめえず。仍て只今、北陸道の方へ行むかふ也」と云々。夢さめて、落涙ことにをさへがたし。三箇日を経て、北陸道より大檀越上浴して、俄に千僧供をぞひきける。

其後ぞ、千僧供をばかならず座主受用せられる。

【語釈】

一 本書筆者：詞書の筆者を記した極札。第一段「一条殿兼良公」、第二段「能阿弥」、第三・四段「金阿弥」、第五段「若州衆井上能登守忠英」とある。この極札は、〈顛〉も同様に記す。

二 一条殿兼良公：室町時代の公卿。応永九年（一四〇二）～文明一三年（一四八一）。有職故実に通じ、学識当代一といわれた。歌学にもすぐれ、『新統古今和歌集』の和漢両序を記した。著に、

《資料紹介》『山王靈験記』『頼蒙阿闍梨絵卷』翻刻・注釈（上）

『花鳥余情』『日本書紀纂疏』『歌林良材集』など。

三 第二十六代の座主：『天台座主記』に「二十六世僧正法印院源。西方院。治山八年」とある。

四 院源：平安中期の僧。天曆五年（九五二）ごろ～万寿五年（一〇二八）。寛仁四年（一〇二〇）天台座主となる。晩年は西塔北尾谷西方院に隠棲した。『今昔物語集』巻一九・四「撰津守源満仲出家語」は、院源の説法に心を打たれた源満仲が即座に出家したことを伝える。本説話の関連説話は未詳ながら、『御堂関白記』『小右記』といった公卿の日記や『紫式部日記』『栄花物語』などから、院源が一条朝の頃、藤原道長の厚い信頼を受けていたことが窺える。

五 後一条院：第六八代天皇。寛弘五年（一〇〇八）～長元九年（一〇三六）。一条天皇の第二皇子。長和五年（一〇一六）九歳で即位、長元九年（一〇三六）に二九歳で亡くなる。在位二年の間には道長・頼道が摂政関白となり、外戚として権勢をふるった。

六 治安・万寿の比：治安は一〇二二～二四年、万寿は一〇二四～二八年。ともに後一条天皇の治世の年号で、院源が座主に任ぜられた期間。飢饉とは直接関わらないが、『今昔物語集』巻一九・一〇は治安三年の全国的な疫病の流行を、『扶桑略記』『小右記』は、万寿二年の疱瘡の流行を記す。

七 煙を断し…かまどから立ちのぼる煙が絶えること。「げにや寒竈に煙絶えて春の日いとど暮らしがたう」（『閑吟集』八九）

八 山王…日吉大社の祭神。日吉山王権現。最澄が延暦寺を建立した時、比叡山山麓に祀られていた日吉の神を、中国天台山の山王（まのう）祠（まのう）にちなんで天台宗の護法神と定めたことから起こる。山王は靈山を守護する神靈の意。（↓「権現」一段 注一六）

九 夢想…夢の中に神仏の示現があること。

一〇 大宮…一般に神社・社殿をいうが、ここでは日吉七社のうちで第一に位置する社をさす。「日吉の社に忍びて詣でさせ給へり。大宮の御前に夜もすがら御念誦し給ひて、御心のうちに、いかめしき願どもを立てさせ給」（『増鏡』二二「新島守」）

一一 宝前…神仏を祀った所の前を尊んでいう語。「八幡大菩薩の御宝前にもとどりとりあげ」（『平家物語』六「廻文」）

一二 枕のうへ…誰の枕であるのか不審。この場面、院源は夢の中で大宮宝前を詣でている。〈妙〉には「床の上」とあり、意味が通じる。

一三 衰弊…勢いを失いおとろえ弱ること。

一四 草庵…藁や茅などで屋根を葺いた粗末な家。

一五 自ら…おのずから。万一。

一六 権現…仏菩薩が衆生を救うために、日本の神に姿をかえてこ

の世に現われた神。日吉大社に祀られている神々は、神仏習合のもと山王権現と称された。（↓「山王」一段 注八）

一七 法命…仏法の命脈。「堂塔、経卷を南都園城に焼払て法命を断絶す」（『源平盛衰記』三〇「覚明語山門事」）

一八 千僧供…千人の僧を招いて法華経などの読誦を乞い、供養を行なう法会。インド・中国で行われ、日本でも古くから営まれた。

平安時代ごろより盛んとなる。千僧供養、千僧会とも。千僧供の例として、『日本紀略』天曆元年（九四七）三月二八日条に、延暦寺で行われた記録がある。「太上（朱雀）天皇於延暦寺講堂。令修法会。又有千僧供養。是為救東西狂乱也」。

一九 北陸道…五畿七道の一。若狭・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡の七か国。

二〇 大檀越…布施などを多くし、寺の維持・経営のために助力する人。大檀那とも。「其ノ後ハ、此ノ男聖人ノ為ニ大檀越ト成テ、常ニ山寺ニ行テ心ヲ至シテ供養ジケリ」（『今昔物語集』一一・二七「魚化成法華経語事」）

二一 ひきける…千僧供の用意をしてとり行つた。

二二 受用…法を説いて法樂を味わわせること。院源が千僧供を行つたことは、『天台座主記』寛仁四年（一〇二〇）にみえる。

第二段 暹賀・聖救

【翻刻】

1 本書筆者／能阿弥／比叡山に暹賀聖救とて二人の明哲侍けり兄／弟とぞ聞る共に智行優長の人也²幼³しては／駿河国にぞ住ける其あたりに社のありけるに／巫女あつまりて神楽などしけるに兄弟つれつ、／見けるに大なる蜂二来⁸て此二人の上に飛⁹／廻りければかたへの人¹⁰私のけむとしけるに／巫女託宣して云様蜂は山王の侍者なり／努々とふ事なかれ此二人は則叡山に上りて／徳をひてへき器也神明かつく侍者¹⁶をさし／くたしてまほらしめ給なりされは今もつ、しむ／へき事ありてといひければ父母これを／き、て則叡山へそのほせける兄は暹賀とて／第廿二代の座主也智行共に兼て八十五／歳までそおはしける弟は聖救僧都とて／探題の職にいたり時の名徳なりけり／(絵②)

【異同】

1 本書筆者能阿弥(妙・利)ナシ。2也(利)「なりけり」。3幼しては(利)「幼にしては」。4其あたりに(利)「やどのあたりちかく」。5巫女(利)「神子ども」。6しけるに(利)「しけるを」。7兄弟(妙)「兄弟」。8来て(妙)「来りて」。9此二人(利)「此小生」。10人(利)「人々」。11しけるに(利)「しける程に」。12巫女(利)「巫」。13云様(利)「云」。14侍者(妙)「使者」。15ひてへき(顯・妙)「ひらくへき」。16侍者(妙)「使者」。17さしくたして(利)「はしらして〔け脱カ〕」。18つ、しむへき事ありてといひければ(利)「つ、しむべき事あるゆへなりとぞ」。19のほせける(利)「のほせてける」。20第(顯)「弟〔第〕」。21弟は(妙)「弟も又」、(利)「弟も」。22探題の職にいたり(利)ナシ。

〔資料紹介〕『山王靈験記』『頼蒙阿闍梨絵卷』翻刻・注釈(上)

【釈文】

本書筆者 能阿弥

比叡山に暹賀・聖救とて、二人の明哲侍けり。兄弟とぞ聞る。共に、智行優長の人也。幼しては、駿河国にぞ住ける。其あたりに社のありけるに、巫女あつまりて、神楽などしけるに、兄弟つれつ見けるに、大なる蜂二来て、此二人の上に飛廻りければ、かたへの人私のけむとしけるに、巫女託宣して云様、「蜂は山王の侍者なり。努々とふ事なかれ。此二人は則ち叡山に上りて、徳をひてへき器也。神明かつが侍者をさしくだして、まほらしめ給なり。されば今もつしむべき事ありて」といひければ、父母これをききて則ち叡山へぞのほせける。

兄は暹賀とて第廿二代の座主也。智行共に兼て、八十五歳までぞ

おはしける。弟は聖救僧都とて、探題二の職にいたり、時の名徳三なりけり。

【語釈】

一 能阿弥：室町時代の水墨画家。応永四年（二三九七）～文明三年（一四七二）。將軍足利義政に任せ、同朋衆の一人として將軍家伝来の書画の管理鑑定に携わるとともに、連歌師・香の上手・表具師・座敷飾りの指導者など幅広い活躍をみせた。

二 暹賀：平安中期の僧。延喜一四年（九一四）～長徳四年（九九八）。幼少のころ聖救とともに比叡山の良源について出家。顕密二教を学び、本覚院をひらいた。正暦元年（九九〇）天台座主となる。『日本仏教人名辞典』（宝蔵館、一九九二年）によれば、聖救が兄で暹賀が弟とあるべきところ。ただし『本朝高僧伝』は、「暹賀」の項に聖救を暹賀の「弟」と記し、かつ「聖救」の項に暹賀を聖救の「族弟」と記す。なお、『僧官補任』『宝幢院檢校次第』からは、暹賀が聖救よりも九年早く宝幢院主に任ぜられたことが分かる。

三 聖救：平安中期の僧。延喜九年（九〇九）～長徳四年（九九八）。暹賀とともに良源に学び、比叡山の西塔院に入る。『応和宗論記』（『大日本史料』所収）や『元亨釈書』によると、応和三年

（九六三）に宮中で行われた応和宗論において、第五日目「夕座」の講師として、その名がみえる。正暦五年（九九四）大僧都となる。

四 明哲：才知がすぐれ道理にあきらかな人。

五 智行優長：智慧と修行に優れていること。

六 駿河国：律令国制における東海道の一國。現在の静岡県の東半部。『天台座主記』に、暹賀は「駿河國人」とある。

七 神楽：神をまつるために神前に奏する舞樂。

八 蜂は山王の侍者なり：「山王」は、日吉山王権現。蜂を山王の侍者とする例は、未見。ただし、『注好撰』中巻・七「精進弁は睡を戒む」に、釈迦如来が大きな蜂となって眠ってばかりいる得樂止の目を覚まさせた話がみえる。（↓「山王」一段 注八）

九 ひてへき：文意不明。（頼・妙・利）は「徳をひらくべき」とある。

一〇 かつがつ：さしあたって。

一一 第廿二代の座主：『天台座主記』に、「第二十二世少僧都暹賀。本覚房。治山八年」とある。

一二 探題の職：寺院で經典を論議する時、論題を選定し、問答の可否を判定する役職。題者、探題博士、博士とも。

一三 名徳：名声が高く徳行のある人。僧侶の尊称としても用いる。

第三段 頼豪

【翻刻】

1 本書筆者／金阿弥／中比山門の長宴南都の永超東寺の／成尊三井の
 頼豪として智行高明顕密兼／学して震旦までも聞たる碩徳ありけり／
 6 白河院継体の君ましまさ、る事を歎き／思食して承保元年に頼豪に
 7 勅して／の給けるは太子を析出すへし勅賞は請／によるへしと云々
 8 頼豪勅を承て懇祈を／いたす中宮賢子忽に懐日ありて承保／元年十
 二月廿六日皇子誕生あり敦文親王／是也叡感比類なき所に頼豪賞を
 申す／戒壇をゆるさるへきよしを申す三井戒壇／はたやすくゆるさ
 12 れかたきよし勅答ありければ／頼豪恨ふかくして即本坊に帰七日の
 14 間また／く飲食をたつ上皇此事を聞召して承暦／元年八月比江師匠
 16 房卿勅を承て実相房／に向て案内を伺に頼豪僅対面すといへ／とも
 19 其体甚怖畏すへし霜髮長生て老／体憔悴す両眼は底にしつみ白髮は
 針を／たて忿怒の面を現し声をあけて勅約違／変のうへは一生の行
 23 業をもて三途の怨因に／廻向し我析出すところの王子ははやく相具
 し／たてまつるへきなり其向顔只今最後也とて／障子をたて、けり
 26 匡房卿よしなき御使して／無益の事見つと思てはう／退出してけ
 り／事の次第を奏聞しければ上皇も気むつ／かしくそおほしめしけ
 る／(絵③)

《資料紹介》『山王靈験記』『頼豪阿闍梨絵卷』翻刻・注釈（上）

【異同】

1 本書筆者金阿弥―〈妙・利〉ナシ。2 山門の長宴南都の永超東寺
 の成尊三井の頼豪―〈利〉「山門長宴、南都永超、東寺成尊、三井
 頼豪」。3 高明―〈利〉「高明」。4 顕密兼学して―〈利〉「顕密兼学
 にして」。5 碩徳―〈利〉「貴碩徳」。6 白河院―〈利〉「白河法皇」。
 7 継体の君―〈妙・利〉「継体君」。8 の給けるは―〈妙〉「の給ハ
 く」、〈利〉「のたまはく」。9 懇祈をいたす―〈利〉「懇念をいたす
 あひだ」。10 懐日ありて―〈利〉「懐日の祥ありて」。11 承保元年十
 二月廿六日皇子誕生あり敦文親王是也―〈利〉「敦文親王いでき給
 にけり」。12 よしを申す―〈利〉「趣なり」。13 三井戒壇―〈妙〉「三
 井の戒壇」。14 またく―〈利〉「またく」。15 承暦元年八月比―
 〈利〉ナシ。16 勅を承て―〈利〉「勅使として諫仰られければ」。17
 案内を伺―〈妙〉「案内伺」。18 僅―〈妙〉「僅ニ」、〈利〉「わづか
 に」。19 霜髮長生て老体憔悴す両眼は底にしつみ白髮は針をたて―
 〈利〉「霜髮長生、老体憔悴、両眼沉底、白髮立釘」。20 現し―〈利〉
 「現して」。21 声―〈利〉「暴厲の声」。22 あけて―〈利〉「あげて云、
 論言汗のことしとこそ申せ」。23 三途の怨因―〈利〉「三途□因
 「怨」。24 廻向し―〈利〉「廻向す」。25 王子は―〈妙〉「王子」。26
 其―〈利〉「君の」。27 はう／く―〈妙〉「はらく」、〈利〉「さ
 う／く」。

【釈文】

本書筆者 金阿弥^一
中比、山門の長宴・南都の永超^二・東寺の成尊^三・三井の頼豪^四とて、
智行高明^二・顕密兼学して、震旦^{一四}までも聞たる碩徳^{一五}ありけり。
白河院^{一六}、継体の君ましまさざる事を歎き思食して、承保元年に頼
豪に勅しての給けるは、「太子を析出すべし。勸賞は請によるべし」
と云々。頼豪、勅を承て懇祈をいたす。中宮賢子^{一九}、忽に懐日^{二〇}ありて
承保元年十二月廿六日、皇子誕生あり。敦文親王^{二二}、是也。観感^{二三}比類
なき所に、頼豪、賞を申す。戒壇^{二四}をゆるさるべきよしを申す。三井
戒壇はたやすくゆるされがたきよし勅答ありければ、頼豪、恨ふか
くして、即ち本坊に帰り、七日の間まったく飲食をたつ。
上皇此事を聞召して、承暦元年八月比、江師匡房卿^{二五}勅を承て、
実相房^{二七}に向て案内を伺に、頼豪僅に対面すといへども、其体甚だ怖
畏すべし。霜髪^{二八}長く生て、老体憔悴^{二九}す。両眼は底にしづみ白髪は針
をたて忿怒^{三〇}の面を現し、声をあげて「勅約違変のうへは、一生の
行業^{三三}をもて三途の怨因^{三四}に廻向し、我析出すところの王子は、はやく
相具したてまつるべきなり。其向顔^{三六}、只今最後也」とて、障子^{三七}をた
ててけり。匡房卿「よしなき御使して、無益の事見つ」と思て、
はうはう退出してけり。事の次第を奏聞しければ、上皇も氣むつか
しくぞおぼしめしける。

【語釈】

- 一 金阿弥：能阿弥の父か。金阿弥の名は『国史大辞典』『阿弥派』の項目に見え、活動期間は応永年間（一三九四～一四二八）前期とある。（↓「能阿弥」二段 注一）
- 二 中比：そう遠くない昔。
- 三 山門の長宴・南都の永超・東寺の成尊・三井の頼豪：冒頭部分は漢文訓読体の格調高い文体である。「帝問其名字。尋答云。東寺成尊。天台長宴。三井頼豪。南都」（『満濟准后日記』永享三年四月四日条）
- 四 山門：比叡山延暦寺のこと。天台宗の総本山。天台宗の流派は比叡山の山門と三井寺（園城寺）の寺門に大別され、その対立は深かった。寺門派にとつて戒壇の設置は悲願であったが、山門派は事あるごとにこれを妨害した。（↓「戒壇」第三段 注三三）
- 五 長宴：平安中期の僧。長和五年（一〇二六）～永保元年（一〇八二）。大原勝林院に住み、大原僧都と称された。著に『五相成身私記』『大原集』など。
- 六 南都：奈良の興福寺。法相宗の大本山。比叡山延暦寺を北嶺というのに対する語。
- 七 永超：平安中期～後期の僧。長和三年（一〇一四）～嘉保二年（一〇九六）。興福寺に学び、嘉保元年（一〇九五）法隆寺の別当

となった。著に『東城伝灯目録』など。

八 東寺：真言宗東寺派の総本山。教王護国寺の通称。

九 成尊：平安中期の僧。長和元年（一〇一二）～延久六年（一〇七四）。後三条天皇からの信頼が厚く、延久四年（一〇七二）東

寺一長者となった。著に『小野六帖口決』『真言付法纂要鈔』など。

一〇 三井：天台寺門宗の総本山。園城寺。

一一 頼豪：平安中期の僧。応徳元年（一〇八四）に年八十余で入滅。阿闍梨実相坊。園城寺の心誉につき出家。頼豪説話は、『平家物語』諸本のほか『源平盛衰記』巻一〇、『愚管抄』巻四などにみえる。ただし、敦文親王が薨じたのは痘瘡のためであり、頼豪呪詛によって薨じたとする説話は、虚構である（↓「敦文親王」第三段 注二二）

一二 智行高明：智恵と修行が立派で優れているさま。

一三 顕密兼学：顕教と密教との教えを学び修めること。

一四 震旦：古代中国の別称。

一五 碩徳：徳の高い僧。

一六 白河院：第七二代天皇。天喜元年（一〇五三）～大治四年（一二一九）。延久四年（一〇七二）即位。応徳三年（一〇八六）八歳であった堀河天皇に讓位をした後、上皇として院政をはじめ、

堀河・鳥羽・崇徳天皇の三代、四三年間執政した。

一七 継体の君：皇太子のこと。白河天皇は父後三条上皇の遺命により異母弟の実仁親王を皇太子としていたが、自身の実子による皇位継承を目論んでいた。

一八 承保元年：一〇七四年。承保は、白河天皇治世の年号。

一九 中宮賢子：藤原賢子。源顕房の娘であったが、摂関家藤原師実の養女となった。延久三年（一〇七一）東宮貞仁親王（後の白河天皇）に入内し、延久六年（一〇七四）中宮となる。白河天皇との間には二男三女があり、次男は堀河天皇として即位した。応徳元年（一〇八四）二八歳の若さで崩御。白河天皇の寵愛が深かったことが、『古事談』巻二・五三などにみえる。

二〇 懐日：懐妊の時にみえる奇瑞の一つか。（利）「懐日の祥ありて」とある。『仏本行経』は、仏の誕生に際して「女夢日光明入腹、因此懐妊生吉子」と記す。「懐日」の例として「謹具東海和尚行実」に「母夢見懐日有娠而生」、『仁壽鏡』に「夢懐日妊」などがみえる。

二一 敦文親王：白河天皇の第一皇子。母は中宮賢子。承保元年（一〇七四）に生まれ嫡子としての期待を集めたが、承保四年（一〇七七）夭折した。『水左記』『栄華物語』『扶桑略記』は、敦文親王が薨じたのは痘瘡のためと記す。

- 二二 叡感：天皇の感動。
- 二三 戒壇：戒律を授けるための場所。ここで授戒を受けることによつて正式な僧尼として認可された。日本では、天寶勝宝六年（七五四）に鑑真が東大寺に築いたのが最初。次いで天平宝字五年（七六一）に筑前国観世音寺と下野国薬師寺に設置され、天下の三戒壇と称せられた。弘仁一三年（八二二）には、最澄によつて比叡山延暦寺に大乘戒壇が設置された。
- 二四 上皇：白河上皇。「白河院」として前出。承暦元年の時点では、白河天皇は在位中だが、上皇と称される。（↓「白河院」三段 注一六）
- 二五 承暦元年八月比：承保から承暦へと改元されたのは、承保四年（一〇七七）年十一月十七日である。したがつて、「承暦元年八月」は、承保四年八月のこと。
- 二六 江師匠房：平安後期の公卿。大江匡房。長久二年（一〇四一）～天永二年（一一二一）。著に、『江家次第』『本朝統文粹』『江談抄』など。頼豪のもとを訪れた当時、美作守、三七歳。『愚管抄』には、頼豪と「師壇ノチギリ」を結んでいることが理由で勅使に任じられたとある。
- 二七 実相房：頼豪の住まう僧房。『十訓抄』は頼豪を「故実相房の上人」と記す。

- 二八 霜髮：霜をおいたように白い髪。
- 二九 憔悴す：疲労や心労のためにやつれること。
- 三〇 忿怒：憤怒に同じ。いきどおり、いかること。
- 三一 勅約違変：頼豪が申し出た戒壇設置の要請に、白河天皇が心じなかつたことを指す。
- 三二 行業：仏道の修行。
- 三三 三途の怨因：「三途」は、地獄道・餓鬼道・畜生道の三悪道で、亡者が生前の悪業のために赴く三つの世界。「怨因」の語は未詳ながら、『沙石集』の巻八・五「死の道知らざる人の事」に「三途の業因」（三悪道に堕ちる業因）の例がみえる。
- 三四 廻向：本来は、自分の行つた善根功德をめぐらし、自分や他のものの悟りにさし向ける意だが、ここでは敦文親王を三悪道にさし向けるの意。
- 三五 折出すところの王子：頼豪が祈りによつて誕生させた敦文親王。
- 三六 向顔：顔を向き合わせることに。対面。
- 三七 障子をたてて：障子を閉ざすこと。
- 三八 はうはう：頼豪の劍幕に、急いで退出するさまをいったもの。〈妙〉「はうくく」、〈利〉「さうくく」とある。
- 三九 気むつかしく：うす気味わるく。

注

① 本稿作成の経緯は、次のようである。

本稿は、二〇一五年度同志社大学院後期課程の演習科目（担当教員 廣田收）での発表と議論をもとにしている。この研究に参加し、翻刻と注釈にあたった者は、以下の七名である。所属は二〇一五年当時のものである。

風岡 むつみ 城阪 早紀（本学博士後期課程）

倉島 実里（本学博士前期課程修了生）

嶋中 佳輝（本学博士前期課程）

藤巻 壮史 八木 智生（本学学部生）

本研究の成果報告として既に、城阪早紀編『山王靈驗記』「頼蒙阿闍梨絵巻」注釈（二〇一六年三月、私家版）がある。私家版には、【現代語訳】【絵の解説】【各説話の考察】もあわせて記したが、本稿では紙幅の都合から省かざるを得なかった。本稿作成にあたり、改めて城阪が【翻刻】【異同】【釈文】【注釈】についての修正と加筆を行った。本来この研究の成果は先に記した各位に属するものであるが、僭越ながら私の名においてまとめさせて頂いた。

② 広島大学図書館、デジタル郷土図書館、「広島大学所蔵 奈良絵本・室町時代物語」、頼蒙阿闍梨絵巻「解説」。

<http://opac.lib.hiroshima-u.ac.jp/portal/dc/kyodo/narahun/ajari/ajarihumi>（二〇一六年九月アクセス）。

③ 「頼蒙阿闍梨絵巻」に関する主な先行研究は、次のようである。

梅津次郎「山王靈驗記絵巻——蓮華本その他——」『美術研究』九九、一九四〇年三月。

梅津次郎「山王靈驗記絵巻——蓮華本その他——」『美術研究』一〇〇、一九四〇年四月。

（資料紹介）『山王靈驗記』「頼蒙阿闍梨絵巻」翻刻・注釈（上）

近藤喜博「山王靈驗記とその成立年代」『国華』七七二、一九五六年六月。

近藤喜博「山王靈驗記とその成立年代（続）」『国華』七七二、一九五六年七月。

宮次男「山王靈驗記」『国華』八一七、一九六〇年四月。

梅津次郎「山王靈驗記絵巻雑記」『国華』九八四、一九七五年九月。

奈良国立博物館監修「社寺縁起絵」角川書店、一九七五年一〇月。

小松茂美・尾下多美子「山王靈驗記 地藏菩薩靈驗記 続日本絵巻大成」

二、中央公論社、一九八四年。

下坂守「山王靈驗記」の成立と改変」『京都国立博物館学叢』一一、一九八九年三月。

松本公一「山王絵詞」詞書について（一）——巻一〜巻五第四段——『文化史学』四五、一九八九年一月。

松本公一「山王絵詞」詞書について（二）——巻五第五段〜巻二第一段——『文化史学』四六、一九九〇年一月。

松本公一「山王絵詞」詞書について（三）——巻二第二段〜巻一四第一段——『文化史学』四七、一九九一年一月。

小松茂美「山王靈驗記 地藏菩薩靈驗記 続日本の絵巻二三」中央公論社、一九九二年。

田嶋一夫「山王利生記成立考」『説話集の世界II——中世——』勉誠社、一九九三年。

④ 梅津次郎氏は前掲論文「山王靈驗記絵巻雑記」において、細見家蔵本

一卷・里見家蔵本一卷・四天王寺蔵本一卷の存在を指摘する。また、『国史大辞典』の「山王靈驗記」の項目は、某家所蔵本一卷をくわえる。

『山王靈驗記』の諸本に関しては、小松茂美氏が『山王靈驗記 地藏菩薩靈驗記 続日本絵巻大成二』「山王靈驗記の盛行」において伝本系統図

一一三

を、田嶋一夫氏が「山王利生記成立考」に山王説話集の諸本を示しておられる。参照されたい。

- ⑤ 広島大学図書館、デジタル郷土図書館、「広島大学所蔵 奈良絵本・室町時代物語」頼豪阿闍梨絵巻「画像と翻刻」。

<http://opac.lib.hiroshima-u.ac.jp/portai/dc/kyodo/naraihon/research/27/>（二〇一六年九月アクセス）。

- ⑥ 注⑤に同じ。

⑦ 頼豪説話に関する主な先行研究は、次のようである。本説話は、『平家物語』研究の側から『愚管抄』の本文依拠をめぐって議論が重ねられてきた箇所であるが、ここでは本絵巻に関連深い論考のみを掲げる。

後藤丹治「平家物語出典考」『戦記物語の研究』筑波書店、一九三六年。
植村真知子「隆明・頼豪の物怪について——『讃岐典侍日記』解釈の上から——」『古典と民俗——研究ノオト——』八、一九七九年四月。

名波弘彰「『平家物語』に現われる日吉神社関係説話の考察——中世日吉神社における宮籠りと樹下僧——」『文芸言語研究 文芸篇』九、一九八四年、一二月。

山本ひろ子「異神と王権——頼豪説話をめぐって——」『異神 中世日本の秘教的世界』平凡社、一九九八年。

松田宣史「頼豪説話の発生と成長（上）」『国学院雑誌』九四・八、一九九三年八月。

松田宣史「頼豪説話の発生と成長（下）」『国学院雑誌』九四・九、一九九三年九月。

後藤祥子「讃岐典侍日記補注——頼豪・更衣——」『国語と国文学』七四・六、一九九七年六月。

清水由美子「頼豪説話の展開——延慶本『平家物語』を中心に——」『続・平家物語の成立』一九九九年三月。

⑧ 日を懐くことによって女性が妊娠するのは、いわゆる日光感精神話の一つとも考えられる。感精神話について論じたものに、たとえば三品彰英氏の「感精型神話」（『神話と文化史』平凡社、一九七一年）がある。

注釈にあたって、右に掲げた以外の文献・辞書・辞典などからも、多くの教示を得た。紙幅の都合上、記すことができなかったことをお詫びするとともに、深謝を申し上げる次第である。

本稿の諸種の誤りについては、諸賢のご批正を賜りたい。

〔付記〕末筆ながら、今回の報告に関して貴重な資料を提供して頂き、公表することも許されました広島大学図書館に、深く御礼を申し上げます。